

## 個人主義に冒されるキリスト教徒

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

現代カソリックの問題点について、ミラノのカソリック大学マウロ・マガッティ教授とキアラ・ジャッカルディ教授に問う記事(週刊誌 *FAMIGLIA CRISITIANA* 2019年8月25日号)を紹介する。

**問い:** 現代人は福音書でいう「放蕩息子」のようであるが、どうしてこうなったのか。

**ジャッカルディ** (以下ジャとする): それは自由という思想によるものだろう。放蕩息子は、神は父であるという概念を持つ。父は子に対して、どこかへ行ってしまえとは言わない。放蕩息子は、誰が父であるかは知っている。神は放蕩息子が帰ってくるのをいつも待っている。帰ることは祭りのような喜びであり、父と契約を更改することである。

**マガッティ** (以下マとする): 我々現代人は、キリスト教文化の中に育ったが、放蕩息子のように、その文化、社会から抜け出し、神の世界に戻れないでいる。失望して多くの困難の中に生きているのだ。

**問い:** 現代人は、放蕩息子のごとく、父の家に帰りたと思っているのか?

**マ:** 現代の悪い点は、孤独、不十分という感覚、不平等、自然破壊などである。教会の役目は、放蕩息子の良識を呼び起こす声となることである。それは「お前は父の家にいた時どんなに素晴らしい生活をしていたのか思い出さないのか」と語りつつ、息子の帰りたという思いを成就させることだ。カソリックと現代との間には大きな対立があるが、第二ヴァチカン公会議後は対話を生み出した。そして両者はそれぞれの長所を認め合うようになった。第二ヴァチカン公会議から50年が過ぎた。この間、世界は根本的に変わり、もう一つの公会議が必要だとも言えるだろう。

**問い:** 父のもとに帰る意志が消滅した現代において教会の責任は?

**マ:** 教会はいつも歴史とともにあり、罪人でもあるが預言者でもある。しかし、今はその役割がはっきりしないようだ。公会議後に生み出された進歩派と守旧派との間の溝を超えることだ。我々は進歩派でも守旧派でもない。現代が良きことを生み出したことも、また逆に巨大な歪みを生み出したということも知っている。法王が繰り返す言うように、生活の規範を切り替える必要がある。福音書のメッセージを信条として、生活を確立する必要がある。

**ジャ:** もし教会が兄であるならば「出て行くな」と言っただろう。慈悲深い父ならば、新しい契約を結ぶようにしただろう。

**問い:** 教会は同意の信仰ではなく、保証の信仰を持つ必要があるのか?

**ジャ:** 教会と現代人は、キリストが説いたように正逆の動きを学習する必要がある。教理は真理の確実性を伝え、これを肯定する。簡単に言えば、神を愛し、隣人を愛することだ。あとは神についていけばよい。信仰とは語源的には「綱」を意味する。自分の命をあるものに繋ぐことだ。信仰とは「つながり」であり、ある内容に同意することではない。信仰とは委ねることであり、道徳的指標ではない。

**マ:** 信仰は信頼することであり、同時に同意することである。しかし、今日は文化的根底がすっかり変わっている。1960年代までは、一連の個々に分断された世界に生きていた。その時は、信仰とは指示に従うことだった。しかし今日そんなことを説いたら、偏狭主義者ないしはセクト主義者に見られるだろう。教会は聖ペトロ、聖パオロの時代より、福音書の内容を広めようとした。教

会は分断した世界の境界線を突破しようと努力しているのだ。

**問い:** 近代技術は救いの効力の概念を変革した。技術時代における救済とは何なのか。

**マ:** 教会は聖霊の助けによって、2000年の歴史を経てきた。時間と歴史と文化とに対抗することに恐れはなかった。今日、現場の諸問題に対しては、ただ勇気を持ってことに当たるだけだ。2008年以降、政治は大きな力を持ち、さらにそこに技術の問題が絡んできた。戦いは長い。聖書には40年の砂漠の歴史が書かれている。そこを忍耐で乗り越えた。現代人は技術の犠牲になろうとしている。人間が作り出す神像はすべて人間的である。これに対して正しい回答はないが、我々は正直となり、「祈り」をもって前進するしかない。

**問い:** 政治の力と技術の力との違いは、後者が実験室の中で「生命」を創り出せるところにあるのか。

**マ:** 両者の間に大きな進歩の違いがある。政治は技術に凌駕されてしまった。信仰に対する挑戦でもある。キリスト教右派は避妊肯定活動に反対し、左派は人道主義の立場で、移民救済活動に奔走している。両者は協力し合う必要がある。

**問い:** どうしたら今日の人間は、救済について魅力と説得力のある話を見出すことができるだろうか?

**ジャ:** 今日では、救済ではなく、安全性についての話ばかりがなされる。技術で実現された安全性や制御には金がかかっている。しかし救済に関しては完全な論証だけが求められる。「saivo」(救済)というのは語源的には「vivo」(生きる)でないが、「intero」(すべて)が「felice」「しあわせ」ということである。救済は、あの世に行く保証を得ることではなく、この世にあっても最大の喜びの生を享けることである。我々は安全性だけではなく、真の救済をも求めなければならない。

**問い:** ポピュリズムは個人化された人民の病気だと言われるが、教会はいかにこれと戦っていけばよいのか?

**マ:** ポピュリズムは、この30年間に起きた個人主義の反動である。ポピュリズムの代替物は世界主義ではない。問題はその中間に何かがあるかということだ。教会は、地球規模で繋がりを持つ数少ない組織の一つである。教会は人々を導くために、ソーシャルネットワークを使用して人々の憎しみを忘れさせ、兄弟愛の観念を構築させなければならない。

**ジャ:** 個人というのは抽象的だ。法王フランチェスコは、個人文化ではなく、集団文化の出身だ。我々の多くは具体的に人との関係網を持っている。だからヨーロッパは幸運である。

**問い:** カソリックはなぜヨーロッパで危機なのか? またどうしたら活性化できるか?

**ジャ:** カソリックは、個人主義と抽象的なものに囚われている。同じものの繰り返しでなく、人間学的なものを作り出すことが大切である。福音書のメッセージは生命そのもののメッセージだからである。それはキリスト教徒だけの財産だけでなく、全人類の財産なのである。

**マ:** 教会は固く凝り固まってしまい、生身の人間に対応できなくなっている。法王パオロ6世は「教会は人間のエキスパート」であると言われた。今こそキリストの教え、福音書の教えを声高に唱える必要がある。過去に述べたことを繰り返すというのではなく、新しいページを開いて行くことだ。